

本音を言えば、学会や研究会といった集まりは、あまり好きではない。一見「自由な討論」を装いつつ、同じことを同じ言葉で語ることを強いてくる、あの同調圧力が息苦しくてたまらない。

けれど、そんなことを言って引き籠もっているのは研究者としてはやっていけないので、時々はその集まりに顔を出し、たまには研究発表も引き受け、さらには共同研究の外部資金獲得のための書類まで書いたりして、それなりに優等生な振る舞いをするものの、内心ではいつも、学会特有の権威主義的な物言いに反発し、したり顔の偽善にイライラをくすぶらせ——中途半端な反抗を続けているうちに、とっくに「不良少女」なんて甘えていられる年齢ではなくなっていた。

授業でサイードの知識人論を教えていて、「知識人はたんにだだをこねるだけの存在であってはならない、公の場で堂々と語るべきである」という一節を引用したところ、ある学生が受講票に「この引用がすばらしいので、早速フェイスブックにアップします」と書いてきた。フェイスブックにアップするのが「公の場で発言する」行為なのかどうかよくわからないが、だだをこねているだけではどうにもならないのは確か。自分が「知識人」になれるとも思わないが、ちょっとでも何かを変えたいと思ったら、衝突を恐れずきちんと「公」に向かって発言しなくては——もともと、「つぶやき」や「おしゃべり」から「革命」が生まれてしまうような昨今では、どこが「公」でどこが「私」なのか区別がつかないのが、そもそもの問題なのだろうが。